

継承されるキリスト教教育

—「よみがえる言葉の輝き」を中心に—¹⁾

塩野和夫

はじめに

(1) 暗 闇

1993（平成5）年4月、西南学院大学に着任する。40歳であった。それから1年半ほどが経った時、新教出版社から『福音と世界』誌（1994年12月号）の巻頭言を依頼される。「何を書こうか」と様々な思いのよぎる中で、1988（昭和63）年春以来取り組まざるをえなかった5年間に及ぶ苦闘の日々が思い出されてならなかった。あの時、置かれていた暗闇とは何なのか。暗闇における苦闘は何であったのか。

(2) 知恵の言葉

1988年4月、すべては順調だと思われていた教会が突然に極めて困難な状況となる。「塩野牧師を辞めさせるために選出された」と称する役員は、牧師の面前にいくつもの録音マイクを置いた。発言をとらえて攻撃するためである。役員会は検察官による被疑者とされた塩野牧師に対する取り調べ室のごとくなる。その年の秋に私から宇和島で最後に洗礼を受けた方からアドバイスを受けた²⁾。

1) 本稿は2015（平成27）年11月24日に尚綱学院中学校高等学校で開催された「2015年度尚綱学院 建学の精神研修会」における講演を論文としてまとめたものである。なお、尚綱学院より写真6点及び資料に掲載した文章6件の使用を承認いただいた。
2) 参照、「私の教育論」（塩野和夫『キリストにある真実を求めて—出会い・教会・人間像—』26-40頁）

先生は宇和島で実によくされた。しかし、このまま宇和島に留まっていたら、塩野先生は自分の可能性を芽生えさせることもなく終わってしまう。先生はこれまでにすべきことを十分にされた。だから、今は自分を守り、奥様を大切にしなければならない。そして、これからは神様が塩野先生に与えておられる可能性を芽生えさせ、花咲かせ、実らせなければならない。……

このアドバイスを「本当にそうだ！」と納得できたので、宇和島を後にしました。悲しいことが山のようにあった時に、私たちを理解し、味方となり、悲しみを分かち合って下さる方々がおられました。彼らを生涯忘れることはないでしょう。

1989（平成元）年3月に宇和島を後にした。

(3) よみがえる言葉の輝き

大阪の実家に身を寄せた私は医師の勧めに従って、10日間の検査入院をした。いくつかの値はボーダーラインを示し、「病気になる直前だ」と言われる。それらが正常値に戻り、普通の生活を送れるまでに半年を要した。

それから30歳代後半のチャレンジを始める。「潰されたままでは本当の自分を生きることはできない」と考えたからである。まず教会の現場で直面した難しい問題を学問研究の世界において克服するため、1990（平成2）年4月に同志社大学神学研究科の後期課程へ入学した。同時に「土曜日と日曜日だけでよい」という条件だったので、西宮基督教センター教会（現在は「西宮門戸教会」）の牧師を引き受けた。その年の10月からは聖和大学（現在の「関西学院大学教育学部」）の非常勤講師となり、宗教学（実質は「キリスト教学」）を教える。予想もしなかった出来事を経験したのは、この教育現場においてである³⁾。

3) 参照、塩野和夫、前掲書、26-40頁

百名ほどのクラスでしたが、一人ひとりと真向かいになって教えました。そうすると、一年間に彼らは学力においても人間性においても確かな成長を示してくれました。何人かの学生から相談を受けたこともあります。問題を乗り越えた時にある女子学生は、きれいな便箋に課題を克服していった経過と感謝の言葉を記してくれました。一人ひとりの学生を大切に期待して教えた時に、彼らの成長と困難を克服していく喜びを共有できました。そのような日々から、「そうか、ここに私の可能性があった」と気づかされました。

まさにそのような中で蘇ってきて、私をとらえて離さない言葉があった。

「うれしいやないか、塩野。私もいささかお手伝いさせてもらった同志社香里中学校・高等学校で、今日も千名を越える中高生が新島先生のキリスト教主義教育を受けている。うれしいやないか、塩野」。このように語られる柴田勝正さんの言葉はいつも輝いていた。幼少の頃から、輝く柴田さんの言葉を聞かされて私は育った⁴⁾。



うれしいやないか、シオノ!!



校長室の生島吉造先生

卒業式を前にして最後に校長室に招かれた時、生島校長はじっと私を見つめられた。そして、一言ひとこと確かめながら「塩野君には私の志を継いでほしい。私の志を継いでキリスト教主義の教育事業に携わってもらえないかね」と言われた⁵⁾。

あの生島校長の言葉が二十年後に私を捉えた。柴田さんの言葉が私の体の中に輝いた。それは暗闇の中にあった私に行くべき道を示す一条の光でもあった。

あの時蘇った言葉の輝きとは何であったのか。この問いを中心に本稿は構成されている。

-
- 4) 参照、塩野和夫「よみがえる言葉の輝き」（『福音と世界』1994、12、1頁）
「しあわせな人」（塩野和夫『一人の人間に』54-57頁）
「世のため、人のため」（塩野和夫『キリスト教教育と私 前編』21-24頁）
5) 参照、塩野和夫「よみがえる言葉の輝き」（『福音と世界』1994、12、1頁）
「忘れえぬ師」（塩野和夫『一人の人間に』59-60頁）
「生島先生の志」（塩野和夫『キリスト教教育と私 前編』205-207頁）

(4) 建学の精神の基本的特色

「よみがえる言葉の輝き」の根底には生命がある。それは人を温め、生きる力を与え、歩むべき方向を示す。この生命は「キリストの輝き」（ヨハネ福音書1章4-5節a）を示している。これが真実であれば、「よみがえる言葉の輝き」は尚綱学院における建学の精神に対して示唆を与えている。学院は今日までキリストの生命に依拠して歩んできたからである。



創立者ミード（左）と初代校長ブゼル（右）
『120年の歩み』より

それでは、「学校法人尚綱学院 建学の精神」⁶⁾に認められる特色とは何なのか。

それはまず自由の生み出す柔軟さだと考えられる。建学の精神は中国の古典『中庸』の一節と聖書の言葉によって説明されている。しかも校名を中国古典から採用している事実がこの特色をよく語っている。キリスト教学校の校名がなぜ『中庸』から来ているのか。生命の自由に依拠する柔軟さがここにはある。現在も尚綱学院の教育現場では生徒と学生を育てるために柔軟性を生かしている。人を育てるためには状況に応じた柔軟さが必要だからである。

次いで、内面性を尊重した人間形成の重視である。人間は外面と内面から形成される。したがって、教育にも外面性と内面性を重視するそれぞれの立場がある。尚綱学院はキリストの生命による成長を根本とするので、人間の内面性に重きを置く教育を行ってきた。

最後にすべての根底にキリストの生命がある。キリストの生命は学院を根本から支えて教育共同体を成立させ、教育現場を担う教職員には働く喜びを与え、

6) 「学校法人尚綱学院 建学の精神」（学校法人尚綱学院『120年の歩み』1頁）

学ぶ生徒・学生には人間としての成長を促してきた。

ここからは私の受けたキリスト教教育を紹介し、それとの類比によって明らかにされる尚絅学院のキリスト教育を探っていきたい。

第一章 幼少期の出会い

(1) 頑張っておいで

幼少期が人間の精神形成にとっていかに重要であるのかを自らの経験から証言できる。キリスト教教育を受ける前の幼少期における出会いから本稿を始める理由はここにある。

両親は駆け落ち結婚であった。その頃の様子を母方の大家であった富沢さんから聞いている⁷⁾。

坂口恵美子の母ナヲが二人の結婚に反対した。経済的な理由であったと思われる。1950（昭和25）年当時恵美子が一家の稼ぎ手であり、珠算教授による収入が坂口家を支えていた。母ナヲには塩野と娘との結婚は坂口家の生活に破綻をもたらすと思われ、彼女は元治郎を口汚く罵った。母の反対により結婚は行き詰ってしまう。そこで、恵美子が下した決断は元治郎との駆け落ちであった。着の身着のまま家を出た時、すべての事情を知っていた一人の女性富沢が彼女を励ます。彼女はがま口を開いて中に入っていたすべてを恵美子に与え、言ったのだった。

恵美子ちゃん、頑張っておいで。

7) 「頑張っておいで」（塩野和夫『キリスト教教育と私 前篇』14頁）



一番古い私の記憶、それは時に壁に向かいあるいはふすまに向かって泣いていた母親の後ろ姿である。背中が揺れているので、「母は泣いている」と分かった。3歳から4歳の幼児にとって、それは世界を動かすほどの大変な出来事であった⁸⁾。

和夫の一番古い記憶、それは1955（昭和30）年から1956年にかけて牧野阪の家で泣いていた母の後ろ姿である。声を殺し、肩を震わせて母恵美子は泣いていた。揺れている肩に母は泣いていると分かった。それは三歳か四歳の彼には世界が揺れるたいへんな出来事であった。……

恵美子が泣いていた場所はいつも奥の台所である。時に台所の壁に向かって、時に畳の間と仕切っている襖に向かって彼女は泣いていた。茫然と見つめているしかない和夫には母の身に何が起きているのか知りようもなかつ

8) 「母の揺れている肩」(塩野和夫、前掲書、15-17頁)



古い記憶

た。それでも和夫は幼心に何かを深く感じていた。母の涙・世界が揺れ動く経験、それは彼の心の原風景となった。

(2) うれしいやないか、シオノ！

遠戚にあたる柴田勝正が母方の祖母と両親の間を取り持って和解をもたらして下さった。

それで「柴田さんから受けた御恩は生涯忘れへん！」という父に手をひかれて、正月の挨拶にうかがい始めたのは和夫が5歳の時である。

一通りのあいさつが終わると、柴田は向きなおり和夫の顔を見据えながら「うれしいやないか、シオノ！」と語り始め、「私もいささかお手伝いさせてもらった同志社香里で、今日も千名を越える生徒が新島先生の教育を受けている。こんなにうれしいことはない」と続けるのであった。真剣な語りかけは和夫の心を圧倒し、その声は彼の体と心に響き続けた。だが、「うれしいやないか、シオノ！」と語りかける柴田の顔は、まるで子供のようにも思えた。純粹な喜びで輝いていたからである。

柴田さんはなぜか毎年私に向き直って、「うれしいやないか、シオノ！」と語られた。「1,000名を越える生徒が今日も新島先生のキリスト教教育を受けている。こんなにうれしいことはない」と言われても、何も分からなかった。しかし、子どものように純粋な柴田さんの喜びの声は、毎年幼少期の私の心に強く響いた。

(3) 世のため、人のため

柴田さんから聞かされた言葉がもう一つある。「世のため、人のため」である⁹⁾。

難しい世の中やないか、塩野。おれは先日新島先生が育てた群馬県安中へ行ってきた。何もない所やった。先生の青年期も難しい時代やった。あの時代、あの自然豊かな土地で、新島先生が将来のことをどんな風に考えられたかと思うと、感慨深いものがあつた。新島先生も安中で幕末という時代に将来の日本のため、日本人のために尽くすことを考えられたんやないかな。

質屋という仕事はな、地域社会と共存共栄する商売やった。おれの祖母は大阪の質屋塩野から来た。だから、柴田と塩野は遠戚関係になる。俺が小さい頃は天満に行くと石町という小高い丘の上に塩野の屋敷があつて、塩野が地域社会のためいろいろと尽くしてきたことを聞かされたもんや。ええか塩野、おまえは大きくなったら世のため人のため尽くす人間になるんやぞ。

人生経験を経て老年期に入ろうとしていた柴田さん、しかも父が尊敬してやまない人から真向かいになって言われた言葉「ええか塩野、お前は大きくなったら世のため人のため尽くす人間になるんやぞ」。それは心と体にずしんと響いた。

9) 「世のため、人のため」(塩野和夫、前掲書、21-24頁)

(4) ブゼルの幼稚園

幼少期に決定的な影響を受けた柴田勝正との出会いは、「ブゼル先生の幼稚園」における園児に対するブゼルの存在感について洞察させずにはおかない。『尚綱女学院100年史』は次のように記している¹⁰⁾。

1920年12月、ブゼルは再び日本に戻り、伝道協会の命により岩手県遠野町（現・遠野市）に赴き、遠野聖光幼稚園を開設し、その後14年、「ブゼル先生の幼稚園」として遠野町民の絶大な敬意を受け、今日に至っている。また晩年は、教え子や有志の贈呈した仙台市北四番丁の邸宅に入り、病を押して、仙台バプテスト教会（現・ホサナ教会）幼稚園長として最後まで働いた。

ブゼルは尚綱女学校において信仰と祈り、情熱と細やかな配慮を込めて多くの人を育てていた。彼女はそのように豊かな経験を秘めた人格者として園児の



遠野 聖光幼稚園 1923年（大正12年）6月
『尚綱女学院100年史』より

10) 「幼稚園 前史—伏流水のごとく—」（尚綱女学院100年史編纂委員会『尚綱女学院100年史』286-287頁）

前に立ち、一人ひとりと真向かいになり語りかける。だから園児にも保護者にもブゼルの真実は届いた。そのため遠野聖光幼稚園は「ブゼルの幼稚園」と呼ばれ、彼女は「絶大な尊敬」を受けた。同じことが仙台バプテスト教会幼稚園についてもいえる。

尚綱学院大学附属幼稚園はブゼルの教育精神を継承して園児を育てている。ここで卒園生の声を見ておこう¹¹⁾。

幼稚園の思い出は、いつもぼくの頭の中に宝物としてのこっています。先生方、いろいろとありがとうございました。妹のことも、よろしくおねがいします。

4年生 S. H 君

でも、しょうけいようちえんで一ばんよかったことは、やさしい先生たちと、たくさんの友だちに出会えたことです。

2年生 Y. N さん

素直な卒園生の言葉には幼稚園で大切に育てられたという思いが満ちている。子どもたちの内に秘められた経験を見守り、いつの日か芽生え育つことを期待したい。

第二章 心を動かすキリスト教教育

(1) 一人を見逃さない

1968（昭和43）年4月に同志社香里中学校から高等学校に進む。その時に驚かされたのが、「新しく校長に就任された生島吉造先生の弾けるようなやる気」であった¹²⁾。

11) 「卒園したお子さんから届く便り」（尚綱学院大学附属幼稚園『2015 幼稚園案内 尚綱学院大学附属幼稚園』10頁）

何より新鮮だったのは、新しく校長に就任された生島吉造先生の弾けるようなやる気である。1906（明治39）年生まれの方は、すでに60歳代であられた。しかし、若々しく精悍なのである。校長は、上賀茂の自宅から誰よりも早く学校に来られた。そして、毎朝良心の碑がある庭の端に立たれた。すぐ前は駐車場で、登校する生徒はその前を通った。彼らは5人、10人と集団になって、ゆるやかな坂を登って来る。すると、先生は「お早う！」「お早う！」と声をかけられる。見開かれた眼には、一人の生徒でも見逃さずにおかない気持ちがあった。かなりの生徒は少し手前で校長を認めると、だらしなく外していた制服の胸元あたりのボタンを急いではめた。そして、先生の前で頭を下げるのであった。

校長が立たれたのはほぼ全校生徒が通る場所である。坂道を登って来る彼ら一人ひとりに向かい校長は挨拶された。「一人を見逃さない」思いが校長の行動にはある。良心の碑が立つ庭の前での毎朝の挨拶、チャペル最初の「授業料値上げの話」、「無人牛乳販売」の試みなど、これらはいずれも生徒を大切に、彼らの自主性を育てていこうとする教育方針に基づいていた。

(2) 落伍者への思い

忘れられない思い出がある。1学期も終わろうとしていた頃、生島校長が私に向かって「塩野君！」と呼びかけられた。場所は体育館の前で、校長からいきなり名前を呼ばれてびっくりしたが、その時に聞かされた落伍者に対する先生の話は忘れられない¹³⁾。

塩野君！僕は停学中の生徒を自宅に招くことにしたよ。彼らの多くは、学校教育では評価されない。けれども、人間には成績では測れない大切なものが一杯ある。だから、彼らはきっと社会に出てから大きく伸びてくれる。塩

12) 「新校長のやる気」(塩野和夫、前掲書、113-114頁)

13) 塩野和夫、前掲書、115-116頁

野君には、学校教育で測れない人間の可能性を大切にしてほしい。それから2学期になったら校長室に話をしに来てくれたまえ。京都の自宅にも出かけてくれたまえ！

生島校長は人を育てる大きな立場から「停学中の生徒」について話された。校長のまなざしの根底にはキリスト教教育者としての姿勢がある。つまり、一人ひとりを見逃さないという先生の立場は具体的に落ちこぼれていく一人に対する姿勢に表れている。

生島先生はしかも、「校長室へ、京都の自宅へ」と招いてくださった。招きに応じて、それからは毎月のように校長室を訪ね、年に1回は同級生と京都のお宅を訪問した。

(3) キリスト教教育への情熱

生涯忘れることのできない出来事が起こったのは高校2年生の1学期である。事の発端は生島校長の教育方針である生徒を信頼し彼らの自主性を育てようとする姿勢から生じた¹⁴⁾。

生島校長の教育方針をめぐる生じた学内の混乱とは、高校2年生の1学期に起こったチャペル問題である。生島先生は「生徒の自主性」をとりわけ尊重された。無人の牛乳販売器は、生徒の自主性を育てるために設けられた教育の場である。チャペルも先生にとっては、生徒の自主性を育てるための重要な場であった。2年生の1学期に入ったばかりのチャペルで先生は、「生徒諸君には自立の精神を持って、自らを律してチャペルには出席してほしい！」と要請された。生徒の多くは、校長の発言を当然の要望として聞いていた。ところが、「チャペルに出席する自立の精神なんか持っていない！」と言い出し、公然とチャペルをさぼる生徒が出てきた。もちろん、先

14) 「チャペルの問題」(塩野和夫、前掲書、149頁)

生方は彼らを説得してチャペル出席を促された。ところが、校長の教育方針を盾に取り、教師に抵抗する生徒がいたという。

生島校長は前の数列にしかいない生徒に向かって、「諸君は自立の精神を持って、チャペルには出席してほしい」と真剣に語りかけられた。どれほど生徒を信頼し期待されているかを感じずにおれなかった。

そんなある日、校長室に招かれる¹⁵⁾。

6月中旬のある日、キャンパスで校長から「塩野君！」と呼び止められた。そして、「塩野君、塩野君に聞きたいことがある。校長室に来てくれないかね！」と求められた。

2か月ぶりに校長室を訪ねた。生島先生は早速本論に入り、自らの教育の精神を語られた。その上で、「塩野君は、現在のチャペルをどう思うかね？」と尋ねられた。あの時、真っ直ぐに生島校長の顔を見つめて言った。「ぼくは生島先生の教育の精神を理解し、チャペルの方針を支持します」。生島先生は大きく見開いた眼で頷きながら、「そうかね、そうかね」と繰り返されていた。しかし、私の目に映った校長の顔は苦悩に歪んでいた。

教育とは所詮、一つの魂が一つの心を揺さぶり動かすことに他ならない。

生島校長の言葉である。私たちのために苦悩に歪んでいる先生の顔を目の前にした時、私の心は激しく揺さぶられずにはおれなかった。生島校長の魂が激しく私の心を動かした瞬間である。

15) 塩野和夫, 前掲書, 150頁

(4) ブゼル先生のキリスト教教育

生島吉造先生の存在はキリスト教教育に打ち込むブゼル先生のいくつかの場面と重なって思い起こさせる。

試験場に入るやいなや西洋人が入って来られ、「角田から来た『廣岡たか』とはどの子ですか」と言われた。私はおどおどしながら立ち上がって「私です」と答えたが、どうして私の名をこの外人はご存じなのだろうと不思議に思った。私は田舎者で外人を見たことがなかったので、この人は男か女かわからなかった。その外人は校長のブゼル先生だったのである。

両親は一人娘の私を、角田にある伊具郡立実科女学校に入れず、尚綱女学校に入学させることを希望したのであった。父と母と二人で尚綱女学校を参観し、ブゼル先生にお目にかかり、家庭的な温かい学校であると感じ、入学させようと決心したのだという¹⁶⁾。

「毎朝一杯の味噌汁」が記している「廣岡たかとはどの子ですか」と尋ねたブゼル先生には、一人にかける情熱が表れている。それは一人ひとりの生徒を見逃すまいと挨拶に立たれた生島吉造校長の姿勢と共通する。

生計の見込みのない寡婦や扶養者のいない老人、路頭に迷う貧困者など約30名を収容した。……ブゼルは自営館の会計を担当していた。……会計担当のブゼルは寄付金の減少などによる不足分を自分の小遣いで補填していたと考えられる。……自営館の住人たちはブゼルを慈母のように慕っていたという¹⁷⁾。

16) 大槻（廣岡）たか「毎朝一杯の味噌汁」（尚綱女学院 100 年史編纂委員会『尚綱女学院 100 年史』154 - 155 頁）

17) 「自営館の設立」（尚綱女学院 100 年史編纂委員会、前掲書、76 - 77 頁）



(旧制) 第2高等学校生のバイブル・クラス 1897年(明治30年)
『尚綱女学院100年史』より

「生計の見込みのない寡婦や扶養者のいない老人、路頭に迷う貧困者」の世話をし、彼らから「慈母のように慕われた」ブゼルは、停学中の生徒を大切にされた生島先生の思いを彷彿とさせる。

二高の学生たちがバイブル・クラスに出席するようになった動機はさまざままで、ある者は英語を学ぶために、ある者は西洋文化への憧れから、ある者は友人から誘われるままにメンバーとなった。栗原によると、そのような彼らに、ブゼルは「情熱の霊弾となって彼らにぶつかり、愛情溢れる慈雨となって彼らの心を露すのであった」。また、小西もこう回想している。「彼女は実に真摯熱烈、温か味もあり、豊かな教養の持ち主で、人格そのものが聖書の解釈であり、信仰の表現であった。血潮の漲る若い学徒は感激と感謝を以て霊界へと導かれる」。このように、学生たちは若い外国人女性の人格と宗教的情熱に惹き付けられて、熱心に聖書を学ぶ者になっていった。彼らは、やがて、ブゼルの書齋を「テレストリアル・パラダイス」(地上天国)と呼ぶようになり、土曜日夜のバイブル・クラスだけでなく、日曜日午後にも質問や学びの時を持つようになった。また、火曜日午後には祈祷会ももった¹⁸⁾。

バイブル・クラスの生徒に注がれたブゼル先生の情熱は、生徒を信頼するがゆえにチャペル問題で苦悩された生島先生と通じる。このように生島先生とブゼル先生には共通性が認められる。なぜ、このような共通性が生じたのか。それは彼らをキリスト教教育へと押し出した霊性（スピリチュアリティ）から生み出されたと考えられる。

第三章 育ちゆく生徒・学生

生徒・学生はキリスト教教育者の指導と見守りによって、全人格的に成長する。その軌跡を私の場合を事例に取り上げて検証する。

(1) 実存的問題

多くの中学生と高校生は人間の生死の問題に直面する。私の場合もそうだった¹⁹⁾。

「死に向かっている存在！」という自意識は、昨日までの私と今日の私を変えてしまっていた。この事実に気付くのに時間はかからなかった。二学期が始まると、次々と先生方に質問を浴びせた。「先生、人間は死に向かっている存在です。この問題を解決しないで勉強していても、何の意味がありますか?!」20歳代後半の日本地理の先生は、正直に「僕にも分からない。しかし、中学高校の時ほど広く学べる時はない。これも大切なことだよ！」と答えて下さった。国語の正木先生は少し顔をゆがめて、「塩野君、君は感受性が強すぎるよ!」ととともに答えられなかった。英文法の中島先生に質問すると、困惑した様子でニタニタと笑い、何も言わないで立ち去って行かれた。中学3年生の担任で国語を教えて下さった浜里先生は、黙って質問を受け止めると、卒業式の日に応えて下さった。それは私を感動させた。高校2年生

18) 「バイブル・クラス」(尚綱女学院100年史編纂委員会、前掲書、77-83頁)

19) 『『歎異抄』との出会い』(塩野和夫、前掲書、91-92頁)

の担任で倫理社会を担当された木村先生は、「塩野，キルケゴールを読みたまえ！」と言って、白水社のシリーズを紹介して下さった。……

親鸞の言葉の背後には、どっしりとした彼の実存があった。だから、親鸞の言葉は深く強く生きている。難しくて十分に理解できず説明できなくても、彼の言葉に込められた真実は直感できた。そこには死や無力さと向き合いながらも、信心においてそれらを超え、父母の生死さえ超えた安心の世界があった。親鸞は弥陀への信心によって、死に向かう自分を超えて生きている。ここには確かに解決があった。しかし、「阿弥陀」とは誰なのか。この一事がなお問いとして残っていた。

実存的な問題を尋ねたところ、多くの先生方が正面から答えて下さった。「ありがたいことだ」と思う。しかし、人に聞くだけでなく、自分でも探求を始めた。それは自ずと宗教的真実への求めとなっていく。

(2) 真実との出会い

思いがけない知らせを聞いたのは高校2年生の3月で、場所は岐阜県の神岡鉱山においてだった²⁰⁾。

トレーニングを始めて3日目は、午後からしんしんと雪が降り続いていた。夕方になって雪で分かりにくくなった道を帰り、食堂でくつろいでいた時である。思いがけない電報が母親から来た。「オオザトボクシシス。スグカエレ」と電文にあった。「ええっ、まさか？」とすぐには信じられなかった。それでも事情を説明して食堂にいる人たちに、「この雪の中、明日帰ることはできるのでしょうか」と尋ねた。彼らの返事は、「いや、この時期にこれだけの雪が降ると雪崩の危険があって、車は出ない」というものだった。遅くに帰ってきた中沢のお兄ちゃんからは、「明日は、スキー場には行けない

20) 「神岡鉱山で見た幻」(塩野和夫、前掲書、167-170頁)

だろう。この辺りの家の雪下ろしでも手伝うように」と指示された。

宿舎の近くに保育園があった。翌日は宿舎と保育園の屋根に上り、雪下ろしを手伝った。屋根に上がってみると、周辺の山々が全体像を見せていた。しかし、雪下ろしをしていた時も、周辺の山々を眺めていた時も、心を占めていたのはただただ大里先生である。「大里先生が亡くなられた。大里先生が亡くなられた」。それ以外に、心に浮かぶ言葉はなかった。

そのようにして、茫然と雪山を眺めていた夕方である。夕焼けに輝く雪山に沿って、大里牧師の上っていかれる様子が思われた。その幻に、「ああ、大里牧師は天国に上って行かれるのだ」と、ほんやりと思いついて描いていた。その時である。その時に、予想もしなかった考えが心に浮かんできた。

大里牧師にとって、死は人生の終わりではない。

罪の力も先生の人生を破壊できないからである。

大里牧師にとって、死とは人生の完成である。

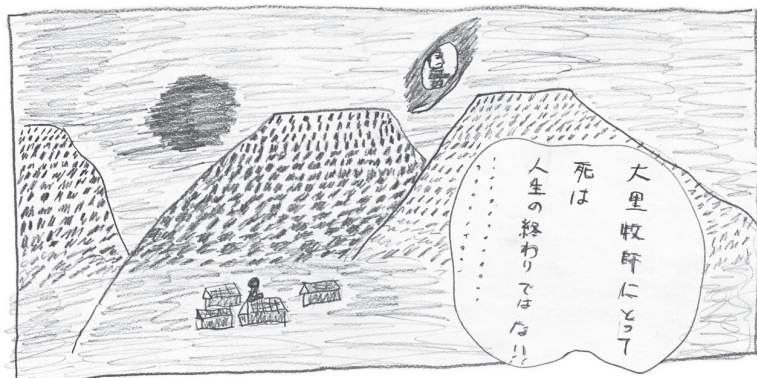
先生は、自分の弱さにあくまでも正直に生きられた。

神の恵みが、大里牧師を生かしたからである。

先生を生かした神の恵みは、死によって先生の人生を完成させる。

このような考えが心に浮かんだ時に、大里牧師の死を通して遂に出会っていた。それは大里先生を生かした真実であり、人を生かす命である。それは、求め続けていた「人間の死と生から生じる問い」に対する答えでもあった。

通っていた教会の牧師、大里喜三先生の突然の死を知らせる電報にうろたえた。茫然と雪山を眺めているしかなかった高校生に、「大里牧師にとって死は人生の終わりではない」とひらめく。それは先生を生かしていた神の恵みに対する直感が開示した真実だった。この真実には中学2年生以来求め続けていた問いに対する答えがあった。そこで高校3年生のクリスマスに、私も神の恵みに生かされるために洗礼を受けた。



神岡鉱山で見た大里牧師の幻

(3) 同志社今昔

高校3年生になると、中学高校と6年間にわたって学んだ同志社に対する関心が強くなった。そこで有志に呼びかけ文化祭でクラス展示として「同志社今昔」を企画した。準備と発表を通して、同志社の教育を学び直す機会となる。この企画に対して先生方がとても喜び、次々と会場に来て下さった²¹⁾。

2学期に入ると、新島襄と同志社の教育に対する関心が強くなった。……そうこうするうちに10月中旬の体育祭も終わる。ある日のホームルームで、私は突然に提案した。……突然の提案を聞かされた教室は静かになった。委員長の提案に賛成するわけではない。しかし、正面切って反対意見も述べにくい。そういう雰囲気の中から、いくつかの慎重な意見が続いた。……数人の意見を聞き、クラスの雰囲気も分かった。そこで、私は新たな提案をした。

新たな提案に対して「それならば手伝ってもよい」という者が出た。とりあえず週に二日を準備する日とし、3年E組の展示をだすことになった。

21) 「同志社今昔」(塩野和夫、前掲書、191-194頁)

展示物を準備する日の放課後、クラスを後にする者が多かった。そのような中で、木村・小永・源島・中川・藤本・堀端・柳田など、10名くらいは残ってくれた。……展示内容は、2部に分かれる。一部は創立当初の同志社で、こちらは時系列で出来事順に準備する。それも模造紙の半分に絵を描いて、分かりやすいものにした。二部は現在の同志社における教育の特色、要するに同志社の校風である。こちらはテーマごとに並列して書いていった。これらを30枚くらいの模造紙に書いていく。準備を始めると、みんなは次第にのめり込んでいった。帰りの時間も遅くなっていく。担任的那須先生が心配して、様子を見に来てくださった。最後の週はさらに遅くなった。とうとう那須先生は差し入れを持って、応援にきて下さった。何とか完成して、文化祭当日を迎えた。

(4) 尚綱学院で育つ



全校教員生徒一同（1909年頃）
『尚綱女学院100年史』より

ここで尚綱学院に学んだ卒業生の事例として、八重樫（星川）リウを取り上げる²²⁾。

開拓者の住まいは掘っ建て小屋（柱を刺しただけ）でランプ生活、食糧もままならず、栄養失調ぎりぎりの体力で開墾するのである。リウはこのようなかで8人の子どもを育てながら、開拓者の母親たちを集めて食生活の知恵などを教えて励まし続けた。『奥中山教会40年史』にリウは、「開拓者の中から自分も含めて必死の思いで離農者、脱落者を出さないためにしたことです。若い時に尚綱の宣教師や、尚綱女学校でよい教師に恵まれ、与えられた知恵や知識が、今ここで開拓に入って役に立つように神さまが備えて下さったにちがいない。神さまのご計画にただ感謝です」と記している。彼女は尚綱女学校時代、1913年に洗礼を受けている。

開拓者の親たちは朝から晩まで働きづめで、子どもたちのことが気になりながらも、手が回らない状態だった。リウはこの姿に心を痛めて、日曜学校を始めた。葉の茂る栗の木の下で讚美歌の音が響き始めた。聖書のお話が語られ始めた。クリスマスには手製のパンを焼き、山苺のジャムを作って子どもたちにご馳走した。そして会堂が建てられ、礼拝が始まった。この小さな芽が成長し続けた。現在、奥中山には教会があり、礼拝には100名を越える参加者がある。

リウは「教会が近くて休むことなく礼拝に出席できることを感謝します。隣人の魂のために祈り、世界平和のために祈る毎日であるように祈り求めています。この世の生活と神に仕えることのどちらを第一にするかという問いかけに、立派に答えられる信仰生活にいるよう祈り続ける決心です」と祈り、神に従い隣人を愛することを願い続けた。

22) 深田寛「八重樫（星川）リウ」（尚綱女学院100年史編纂委員会、前掲書、629-630頁）

互いに励まし合い続けた開拓者の生活は、「若い時に尚綱の宣教師や、尚綱女学校でよい教師に恵まれ、与えられた知恵や知識が、今ここで開拓に入って役に立つように神さまが備えてくださったに違いない」と八重樫は語る。開拓村で始めた教会学校や毎日の祈りの生活も、尚綱女学校での教えが花開いているに違いない。それだけの内容豊かな教育が尚綱で行われていた。

現在の卒業生の声にも耳を傾けたい。彼らは尚綱学院における3年間、あるいは6年間に確かな成長をしている²³⁾。

国際基督教大学 教養学部2年（文系卒業）K・Tさん

尚綱の学びの中で、一番影響されたのは『ジェンダー』の授業でした。私の中に無意識で築かれた社会的規範、男は（女は）こうあるべきという生き方への認識が打ち砕かれました。また、平和研究や批判的思考力など大学で学ぶようなことも学び、自分のビジョンを見出すことができました。大学に入学した今、本格的にジェンダー・セクシュアリティを専攻したいと勉強に打ち込んでいます。

福島大学 人文社会学群2年（文理卒業）A・Kさん

私は中学生の時、ドイツに短期留学し、ホームステイや本格的な芸術鑑賞など日本にはあまりできない多くの経験をしました。この経験は大学の面接試験などその後の生活の中で生かされることが多く、思い切って参加してよかったと実感しています。中学生で海外へ行くのは怖いかもしれませんが、積極的にこういうプログラムに参加すれば多くのことを得られると思います。

23) 「本校から大学へ進学した卒業生のメッセージ」（『2015 学校案内 尚綱中学校・高等学校』3頁）

宮城県職員（東北大学卒業）（特進卒業）R・Sさん

尚綱では、同じ目標を持つ友人たちと切磋琢磨しながら勉強に励み、先生方には丁寧なご指導をいただきました。勉強は大変でしたが、中高を通して部活動にも所属でき、合唱部ではさまざまな場所で歌う機会が与えられました。また、礼拝での奉仕活動や短期留学なども通して勉強だけでは得られない多くのことを経験することができ、有意義な学校生活をおくることができた6年間だったと思っています。

このように変わる事のないキリスト教教育によって生徒と学生は育てられていく。その過程で引き継がれていく真実がある。

第4章 継承されるキリスト教教育

キリスト教教育の精神性は教師から生徒・学生へと継承されていくことを特色とする。なぜなら、教育活動の根底にある精神性こそキリスト教教育をキリスト教教育たらしめ、教育現場における教える者と教えられる者との魂の響き合いを可能ならしめるからである。教育現場で感動を覚えた生徒と学生は、いつの日かそれぞれの現場でキリスト教教育を継承する者とされる。やはり私の場合を事例として紹介する。

(1) 感動的な授業

中学1年生の聖書科の担当は西邨辰三郎先生で、岡本清一『新島襄』をテキストにして1年間教えてくださった。新島の最期を講義された授業である²⁴⁾。

病状の優れない新島先生は、温暖の地大磯の海辺で新年を迎えられます。そこで作られた詩があります。

24) 「同志社の教育」(塩野和夫、前掲書、69-73頁)



聖書科・讚美歌指導の西邨辰三郎先生（たっちゃん）

歳を送り 悲しむを休めよ 病るいの身
鶏鳴早くも 已に佳辰を報ず
劣才 たとい済民の策に 乏しくとも
尚壯図を抱いて この春を迎う

という作品です。この詩には死を目前にされた新島先生の同志社の教育と日本の国を想う心情があふれているのであります！

涙さえ浮かべて語られる西邨先生の感動に中学1年生のクラスは飲み込まれ、静かな緊張感が張りつめていた。それは同志社設立者新島襄のキリスト教教育への情熱に、教師も生徒も感動して一体となっていた場面である。

(2) アンタ、頑張ってや!

同志社香里中学校高等学校の施設課には男性職員数名と女性職員1名がいた。たった一人だった女性職員の仕事は校内の清掃である。私の過ごした6年間は佐々木花子さんがこの仕事を担当しておられた²⁵⁾。

視線が合うと、花子さんは「アンタ!」と声をかけて来られた。続いて、道の真ん中で話し出された。

花子さん アンタ、広い校舎を毎日一人で掃除して回るのはしんどいで。それに悪い生徒もおるしな。それでも、なんでしんどい仕事を続けているか、アンタ分かるか!?

いきなり話しかけられて返答に口ごもる私に、その日花子さんは雄弁だった。

花子さん それはなあ、この学校からエライ人が出てきてほしいと思うからや。そやから、毎日頑張って掃除して回っているんや。

思いがけなかった言葉に、思わず心から花子さんに話しかけていた。

塩野和夫 おばちゃん、ありがとう。おばちゃんが掃除してくれている校舎で勉強できて、僕ら幸せや。

花子さん おおきに、そんなに言ってもらえたら、うれしいわ。

と答えた花子さんはその時、ハンドバックから聖書を取り出して言われた。

25) 「アンタ、頑張ってや」(塩野和夫、前掲書、159-162頁)



帰宅途中の佐々木花子さん

花子さん アンタ、これ貰ってくれへんか。

塩野和夫 ありがとう。でも僕も学校で聖書を勉強してるから、持ってる。

おぼちゃんの聖書、大事にしてや。

花子さん そうか。アンタ、頑張っちゃ!

花子さんと話す機会を与えられたのはたった一度である。しかし、その一度が忘れられない時となる。どんな思いを込めて花子さんは広いキャンパスと校舎をたった一人で掃除しておられたのか。なぜかあの時、その思いを一人の生徒に聞かせて下った。それ以来、校舎を見る目が変わる。花子さんに掃除されている校舎が尊く思え、そこで学んでいる日々をありがたく思えたのである。

(3) 託された志

継承されるキリスト教教育に関する証言はいくつもある。しかし、その中心にあって端的にそのこと自体を語っている出来事がある²⁶⁾。

呼び出しを受け校長室を訪ねたのは、卒業式の数日前である。ソファーに座るようにと指示し、「塩野君に言っておきたいことがある」と前置きされた。……それから一言ひとこと、かみしめる様に語って下さった。

塩野君には人間を見る眼をぜひ養ってもらいたい。……

塩野君は、これから同志社大学経済学部で学ぶと聞いている。しかし、どうか同志社大学で研究を終えないでほしい。……

その上で、塩野君にお願いがある。この3年間、私が同志社香里中学校・高等学校で打ち込んできたことを、塩野君には分かってもらえたと私は信じている。そこで、塩野君にお願いがある。

(ここで、生島校長は少し間をおいて、じっと私を見詰められた)。

ひとつ私の志を引き継いで、同志社のキリスト教教育を担ってくれないかね！

卒業式を数日後に控えたその日、校長室に招かれた私は生島校長から3つのアドバイスを受けた。3つ目のアドバイスをする前に先生は「塩野君にお願いがある」と言って、私を見詰め頭を下げられた。そして、言われた。「ひとつ私の志を引き継いで、同志社のキリスト教教育を担ってくれないかね！」これが私にとって、キリスト教教育の継承そのものを語っている出来事である。

26) 「生島先生の志」(塩野和夫、前掲書、205-207頁)

(4) ブゼル精神を発揮して

尚綱学院においてもキリスト教教育の継承に関わる出来事は山のようにある。ここでは2つの事例から考えたい。その一つは吉井正敏短期大学学長である²⁷⁾。

吉井正敏は1960年4月、院長に就任すると同時に、短期大学学長に就任した。1960年発行の『尚綱新聞』第47号には、「待望の専任院長着任—九州から吉井先生」と題して、次のようなことばを掲載している。



吉井正敏先生
『尚綱女学院100年史』より

院長としての私の夢はというと、初代校長ブゼル先生の教えをうけた者の一人として、ブゼル精神を発揮し、これを現在の生活の中に生かすことでもあります。尚綱の学生・生徒が真に祖国日本の躍進のために、また世界共通の平和のために、将来責任ある母として、また実行性あるクリスチャンとして成長するよう、必要にして十分な教育によって日本一の勝れた女学院にすることである。

「院長としての私の夢」は「初代校長ブゼル先生の教えを受けた者の一人として」、 「ブゼル精神の発揮」だと言う。ここには、教える者の立場においてキリスト教教育の継承が語られている。

もう一つは櫻井・深田親子の事例である²⁸⁾。

27) 「吉井正敏学長時代」(尚綱女学院100年史編纂委員会、前掲書、390-393頁)

28) 深田雪子「母娘2代の寄宿舎生活」(尚綱女学院100年史編纂委員会、前掲書、358-359頁)

「おお、櫻井さん！よく来ましたね」。尚綱女学校時代を語る母の第一声は、いつもこの言葉から始まりました。1914年本科16回卒業の母（櫻井カマリ）は、当時ブゼル先生のバイブルクラスの一員であった兄（弘）の勧めで、岩手県気仙沼郡住田町から入学、初めての仙台、人力車に乗って尚綱の扉をたたいた時、ブゼル先生が喜びをこめて迎えて下さった第1声だったとのこと。期待と不安でいっぱいだった母にとって、その声はゆるがない支えとなって、母は学校生活を始めました。……

1950年、仙台空襲で焼失した寄宿舎再開の報せを聞いた父は、我が娘にも尚綱の教育をとの考えと勧めで、私は1955年、岩手県遠野から尚綱高校に入学しました。当時の寄宿舎は、1893年から校舎としても使用されたという男子宣教師館・木の花寮でした。宿生は岩手県や宮城県からの中学生・高校生・短大生、約20名が生活を共にしました。生活の中心は、教会、学校、寄宿舎での礼拝でした。私は新しい環境の中で人間関係を通して隣人の存在を考える機会を与えられ、高校2年の時キリスト教の神の存在を信じ洗礼を受けました。

櫻井の証言は、彼女がブゼル先生と教員の見守りの下で豊かな学校生活を過ごしたことを知らせてくれる。深田にとっても尚綱高校は全人格的な養いを受けた場であった。このようにして櫻井・深田母娘の事例は、教育を受ける者における継承を語っている。これもキリスト教学校における重要な継承の側面に違いない。

おわりに 一再び、「よみがえる言葉の輝き」一

(1) よみがえる言葉の輝き

あの時、途方に暮れ、どこに進めばよいのか見当もつかない暗闇の中に置かれていた。しかし、「暗闇の中にいたからこそ」と言うべきなのだろうか。

22年ぶりに生島吉造校長から託されたキリスト教教育への志が、35年ぶりに

「うれしいやないか、シオノ！」と語りかけて下った柴田勝正さんの声がよみがえってきた。

それらは行くべき道を示す一条の光でもあった。

(2) なぜ、よみがえったのか？

それにしても35年あるいは22年の時を隔てているにもかかわらず、なぜそれらの言葉はあのように生きいきと蘇ってきたのか。

「よみがえる言葉の輝き」に内在していたのは、キリスト教教育に込められた情熱であり、精神性である。それらは20年30年の時を超えてよみがえり、私たちの心を温かく照らす。それは「イエスはまことの光である」という信仰に基づく。

この信仰を中核に据えることによって、キリスト教教育はイエスの生命に燃やされ生かされる。生命を内在するキリスト教教育は、暗闇にある者を照らす「輝き」となりえるからである。

(3) 尚綱に誇りをもって

尚綱学院はキリストの生命に根ざした教育活動に従事している。それは「暗闇を照らす」だけの生命に満ちた教育であり、だから尚綱学院は自らに誇りを持っている²⁹⁾。

地域の人々と社会に貢献する卒業生を育てる基礎を築いた尚綱学院初代校長のアニー・ブゼルは「学校の人気のあるなしは、その学校の在生や教師方によるよりも、過半は学校を出た同窓生によるものであることを、皆さんは卒業証書と共に



佐々木公明先生
『2015法人案内 学校法人
尚綱学院』より

29) 佐々木公明「尚綱に誇りをもって」(『2015 法人案内 学校法人尚綱学院』1頁)

握って行って欲しいものです」と生徒たちに熱く語りました。……

尚綱学院の2代目校長のメリー・ジェッシーは第2次世界大戦によって、荒廃した人々の心を再生すべく奮闘しました。ジェッシーは「アメリカ人は根のついていない花をくれたので、キリスト教は枯れてしまいます。だからわたしたちはここで根を持ってきて、生徒の心に深く植えることで、使命を果たさなければならない」と、40年の働きの間、信仰に根づいた花を尚綱学院に咲かせようと努力したのです。

現在の尚綱学院はブゼル先生やジェッシー先生によって築かれた礎の上に、不変の建学の精神を継承して、最初は目立たないが、日に日にその真価を発揮する人材を世に送り出していますし、これからもその伝統を継承していきます。

尚綱学院の教職員が誇りを持ち、祈りと知恵と力を注いで教育活動に打ち込む時、教育の場にキリストの生命が宿る。そして、学院は教職員にとっては「やりがいのある働き場」となり、学生・生徒にとっては「全人格を形成できる場」となる。

(4) 見守りのうちに置く

言葉が輝きをもって蘇ってきたのは、私の場合は22年後、あるいは35年後である。この事実は多くの月日を経た後にもキリスト教教育は生命を取り戻し、暗闇の中で輝くと証言している。

だから、尚綱学院の卒業生を見守っていてほしい。彼らが置かれた場において、尚綱学院のキリスト教教育を受けた者としてふさわしく生き、働く日の来ることを期待し続けてほしい。

彼らが尚綱に学んだ日々を誇りをもって生きる時、そこにおいてもキリスト教教育は継承されているからである。

資料

1 塩野和夫「よみがえる言葉の輝き」

「うれしいやないか、塩野。私もいささかお手伝いさせてもらった同志社香里中学校高等学校で、今日も千名を越える中高生が新島先生のキリスト教主義教育を受けている。うれしいやないか、塩野」。このように語られる柴田勝正さんの言葉はいつも輝いていた。幼少の頃から、輝く柴田さんの言葉を聞かされて私は育った。

生島吉造先生が校長として同志社香里中学校高等学校に赴任されたのは、私が高校1年生になった春である。先生の教育には太く貫かれたスピリットがあった。「生徒を信頼し、期待すること」がそれである。登校して来る生徒一人ひとりへの校長のあいさつ、設置された無人の牛乳販売所、多くの生徒が出入りするようになった校長室などの一つひとつが、先生の教育に対するスピリットによるものであった。

ところが、一つの問題が起こった、生島校長の言葉を理由にして礼拝に出席しない多くの生徒が出たのである。そのため、チャペルには最前列の五列か六列にしか生徒は集まらなかった。そのわずかな生徒に向かって文字通りの真心を込めて「私は諸君を信頼している。自らを律して礼拝に出てほしい」と生島校長は語られた。しばらくして校長室に呼ばれた私に「礼拝問題を塩野君はどう思うかね」と尋ねられた。私たちへの信頼ゆえにゆがむ校長の眼差しに、私の心は揺れていた。

卒業式を前にして最後に校長室に招かれた時、生島校長はじっと私を見つめられた。そして、一言ひとこと確かめながら「塩野君には私の志を継いでほしい。私の志を継いでキリスト教主義の教育事業に携わってもらえないかね」と言われた。

あの生島校長の言葉が二十年後に私を捉えた。柴田さんの言葉が私の体の中に輝いた。それは暗闇の中にあつた私に行くべき道を示す一条の光でもあった。二十年の月日、私は伝道者であることを志し、牧師の道を精進した。伝道・牧会の現場で福音が人を救い、癒し、夢を与える現実によく出会った。だが、私は二十年の後に牧師として働く道を断たれた。その暗闇の中で、二十年前の言葉が私の体の中に輝きをもってよみがえった。

クリスマスを迎える。暗きに坐する者に行くべき道を示すことができる輝く言葉とは何なのか、静かに黙想したいと願っている。

(『福音と世界』1994, 12, 新教出版社, 1頁)

2 「学校法人尚綱学院 建学の精神」

尚綱学院は、1892年アメリカ合衆国のバプテスト派婦人外国伝道協会から派遣された女性宣教師たちによって「尚綱女学会」として創設されました。わずか9名の生徒で出発した尚綱女学会は、校名の出典ともなった中国の儒教の書『中庸』の1節「衣綿尚綱」と、『新約聖書 ペトロの手紙1』第3章3節～4節の言葉に示された人間のあり方を建学の精神としました。

衣綿尚綱（詩曰、衣綿尚綱、悪其文之箸也）

中国の「礼記」の編章である古典『中庸』の1節です。金や銀、色鮮やかな糸で織られた美しい着物を着ていたとしても、それを見せびらかせて驕るのではなく、その上に質素な麻の打ち掛けをまとい、綿のきらびやかさをつつましく被うという君子の道を説いた言葉です。

「ベトロの手紙1」 3章3節～4節

建学の精神を表すもうひとつの言葉は、聖書にあります。「あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神の御前でまことに価値があるのです。」

尚綱学院の教育はこれらの言葉に導かれた建学の精神に基づき、内面を豊かに飾り、謙虚な心をもって他者と共に生き、社会に貢献する人間の育成を目的にスタートしました。その想いは120年経った今でも受け継がれ、より大きな想いとなり、尚綱学院の教育の土台となっています。

（学校法人尚綱学院『120年の歩み』1頁）

3 塩野和夫「頑張っておいで」

大阪市近郊で町工場を営む家族の一人娘として坂口恵美子は何不自由のない少女期を過ごした。しかし、戦時体制の強化に伴い政府が金属類の抛出を求めた時、彼女の境遇は一変する。工場の機械は止まり、たちまち坂口家は経済的に困窮した。珠算教室の手伝いで得たわずかな恵美子の小遣いも坂口家の貴重な収入となる。中学校を卒業すると、彼女は珠算教授の出張にも出かけるようになった。

軍隊の召集を受けて満州で軍人として過ごした塩野元治郎が、戦場を知らずにいたのは幸いだった。だが、敗戦と同時にソビエト軍に囚われの身となり、シベリアへ送られる。乏しい食料と厳しい労働を強いられた日々が4年余り続く。1949（昭和24）年によろやく帰国できたが、訪ねた大阪は廃墟と化していて家族もそこにはいなかった。元治郎の父は1944（昭和19）年に亡くなっており、残された母塩野ツマは妹たちと彼女の実家があった福岡県の門司に身を寄せていた。しばらく門司に留まっていた元治郎は、かつての仲間を探し求めて再び大阪に旅立つ。30人ほどの従業員がいた町工場の工場長として働き始めたのは、それから間もなくのことであった。この町工場で塩野元治郎は珠算を教えに来た坂口恵美子と出会い、二人は恋に落ちた。

坂口の母ナヲが二人の結婚に反対した。経済的な理由であったと思われる。1950（昭和25）年当時恵美子が一家の稼ぎ手であり、珠算教授による収入が坂口家を支えていた。母ナヲには塩野と娘との結婚は坂口家の生活に破綻をもたらすと思われ、彼女は元治郎を口汚く

罵った。母の反対により結婚は行き詰ってしまう。そこで、恵美子が下した決断は元治郎との駆け落ちであった。着の身着のまま家を出た時、すべての事情を知っていた一人の女性富沢が彼女を励ます。彼女はがま口を開いて中に入っていたすべてを恵美子に与え、言ったのだった。

恵美子ちゃん、頑張っておいで。

(塩野和夫『キリスト教教育と私 前篇』1-17頁)

4 「毎朝一杯の味噌汁」

大槻(廣岡)たか(1904-2001, 本23, 女子少年院愛光女子学園初代会長)

私は大正5年(1916年), 角田小学校を卒業して尚綱女学校に入学, 大正10年3月卒業した。……阿武隈川のほとりにある伊具郡角田町(現・角田市)から馬車に乗り, 槻木駅から汽車に乗って仙台へ。12歳の私には, 仙台はずいぶん遠い所に思われた。入学試験の日には叔父に連れてられて行った。銘仙の袂の着物に海老茶の袴をはき, 髪は桃われに結って出席した。

試験場に入るやいなや西洋人が入って来られ, 「角田から来た『廣岡たか』とはどの子ですか」と言われた。私はおどおどしながら立ち上がって「私です」と答えたが, どうして私の名をこの外人はご存じなのだろうと不思議に思った。私は田舎者で外人を見たことがなかったので, この人は男か女かわからなかった。その外人は校長のプゼル先生だったのである。

両親は一人娘の私を, 角田にあった伊具郡立実科女学校に入れず, 尚綱女学校に入学させることを希望したのであった。父と母と二人で尚綱女学校を参観し, プゼル先生にお目にかかり, 家庭的な温かい学校であると感じ, 入学させようと決心したのだという。

大正時代の尚綱女学校はまことに小さな学校で, 寄宿舎は講堂と食堂の2階にあり, 寄宿舎の各部屋には電燈がなかったので, 講堂は寄宿生の夜の勉強室として使用され, また食堂は裁縫室等に使用されていた。玄関には時間を知らせる鐘が吊るしてあり, 中に入ると両側に事務所と教員室があり, その2階は舎監の部屋であった。その建物に続いて外人の先生方が居られた西洋館があった。

プゼル先生は生徒を小人数にし親しく教育するという方針で, 全校生, 1年から5年まで100名足らずだったと思う。通学生と寄宿生は半々位で, 遠く北は北海道から, 南は東京等から集まっていた。プゼル先生をはじめ立派な先生方が揃って居られ, 生徒一人ひとりをご指導下さった。プゼル先生は誠に立派なクリスチャンで, ご自身は質素な生活で, 人のために尽くされた本当に愛の実行者であられた。

寄宿舎では雨降り以外, 春夏秋冬朝5時起床, 全員校庭に集まりプゼル先生の号令で体操をした。それがすむと先生は寄宿舎の食堂においでになり, 生徒と同じ味噌汁を一杯召し上がる。上級生がうやうやしく捧げ持って先生に差し上げる。先生はおいしそうに召し上がっ

でご機嫌良く西洋館に帰られる。下級生の私共は、上級生になったらあの様にしなければならないのかと胸をどきどきさせながら見ていたものだった。

(『尚綱』第343号)

(『尚綱女学院100年史』154-155頁)

5 塩野和夫「同志社の教育」

中学1年生の授業は午前に4時間と午後2時間があり、午前の1時間目と2時間目の間にクラスルームや週3回のショートチャペルがあった。土曜日は午前の4時間だけだった。ロングチャペルは月に1回程度だったと思う。科目が変わる度に先生は交代するので、休み時間に次の授業の準備をした。体育の場合だと体操服に着替えて体育館かグラウンドに向かい、音楽の時間には4階の音楽室まで行ったので時間的なゆとりはなかった。

担任の金子先生は数学を淡々と教えられた。言葉の端々に同志社香里で執る教鞭を誇りの思われる気持ちが伝わってきた。何回も言葉をかけて下さったが、勉強に触れられることはなかった。優しい声で言われるのは、いつも「塩野君、運動部に入りなさい!」だった。2学期に柔道部に入ったのは金子先生の影響が大きい。それで入部するとすぐに金子先生に報告した。英語の担当は一瀬先生で、いつも大きなテープレコーダーを抱えて校舎を歩き回っておられた。授業の途中で間をおいてジョークを飛ばされ、英会話中心の授業はとても楽しく、生徒はいつの間にか引き込まれていた。そのために、先生が留学のため1学期だけで交代された時はショックだった。国語の赤尾先生は、香里学園が同志社と合併して同志社香里になった時、新任教員として採用された一人である。先生は現代文を文法を用いて明快に分析したうえで、手振り身振りを交えて文章の内容を深く教えて下さった。文章の向こうにある豊かな世界や執筆者の思索を生徒は想像できた。豊かな国語の時間だった。ある探求心に駆られて、2年生の2学期になると時間を見つけると図書室に通うようになった。毎日挨拶を交わした女性司書の方が、その様子を赤尾先生に報告されたい。購買部などで先生にお会いすると、「塩野君は今、何の本を読んでいますか?」と声をかけて下さるのであった。

1年生で最も印象に残ったのは、聖書科を担当下さった西邨先生である。テナー歌手の西邨先生はアメリカ西海岸で音楽教育を研究されたそうで、「私はリベラルなクリスチャンであります!」と胸を張っておられた。いつも姿勢正しく、折り目の付いたブレザーを着て、首にかけた定期券入れを胸ポケットに収めておられた。岡本清一『新島襄』をテキストにして、1年かけて新島先生の生涯と教えを講義して下さった。先生から聖書を学んだ記憶は全くない。余談が授業に入らない日もなかった。初めの5回くらい出席番号順に生徒を立たせて、こう尋ねられた。「A君、君はどこの小学校出身かね?」「はい。大阪市のS小学校出身です」。「そうかね。大阪市のS小学校かね。あれは良い小学校だ。頑張りたまえ」。ほぼ同じやりとりが10名ほど続く。ある日、いよいよ私の番になった。「塩野君、君はどこの小学校出身かね?」「はい。枚方市立山田小学校出身です」。すると先生は首をかしげ、「枚方市立山田小学校、聞いたことのない小学校だ。しっかり頑張りたまえ」と言われた。首をかしげられる様子にごまかしのない先生の一面を見た。それでほとんどの生徒に伝えられた「あ

れは良い小学校だ。頑張りたまえ」という励ましは口先だけのものではないと思えた。余談の多くは同志社に関する事柄で、あまりに夢中になり時間を忘れておられるようにさえ見える場合があった。

同志社の校章には3つの三角があります。3にはいろいろな意味がありますが、同志社の教育をよく表しているのであります。知育・徳育・体育であります。知育に偏重した教育がありますが、知育だけが教育ではありません。知育・徳育・体育が合わさって教育であり、これが同志社の教育なのであります。

新島先生について語る時、西邨先生はまるで無声映画の弁士のようなようだった。新島襄誕生の場面では、「新島先生の父民治と母おとみには4人の子どもがいましたが、皆女の子でした。それでついに男の生まれた時、」と言ってポンと机をたたき、「祖父弁治は『しめた！』と叫んだのです。そこで新島先生の幼名は七五三太しちごさんたとなったのであります」と弁治になりきっておられた。新島の最期を講義された授業は感動的だった。

病状の優れない新島先生は、温暖の地大磯の海辺で新年を迎えられます。そこで作られた詩があります。

歳を送り 悲しむを休めよ 病るいの身
 鶏鳴早くも 巳に佳辰を報ず
 劣才 たとい済民の策に 乏しくとも
 尚壯図を抱いて この春を迎う

という作品です。この詩には死を目前にされた新島先生が、同志社の教育と日本の国を想う真情があふれているのであります！

このように話された西邨先生の声は震え、眼にはうつつら涙があふれているようだった。先生が我を忘れて新島襄を語られる時、そこにはかつて見聞きした柴田勝正さんの思いに通じる熱いものがあった。そのため、西邨先生の言葉と情熱は真直ぐに心と体にしみ込んだ。この事実を知るのに時間はかからなかった。1年生の12月に入部した柔道部では、練習の初めと終わりに黙想があった。目を閉じ心を静めると「刀折れて止むるなかれ。矢尽きて止むるなかれ」とか、「射る矢にこむる大丈夫の意地」といった新島の言葉が力強く浮かんできた。それで言葉の方向に「新島先生、見ててください！」と呼びかけ、柔道の練習に励んだのだった。「刀折れて止むるなかれ」精神の柔道である。黙想の時に交わした新島襄との対話、それは柴田さんと西邨先生の新島先生を慕う情熱が私の魂に響いていた真実を証言している。

6 深田寛「八重樫（星川）リウ」（1896—1992，本18）

私は21世紀が「魂の豊かさを求める世紀」になることを願っている。そのためには「今まで光が当たらなかった人に光を当てる」ことが大切だと思う。

1916年（大正5年）本科を卒業した八重樫リウに光を当てたい。私の知っている八重樫リウは、奥中山での生活の一部分だけであるが、忘れられない方である。

敗戦直後の日本は食料不足が深刻だった。国は岩手県奥中山に「奥中山開拓団」を結成し、食料確保を計った。団長・八重樫治郎，副団長・野沢義雄，事務長・川守田麟三の3役，団員所帯数550戸に上る開拓団である。そして不思議なことに，3役全員がクリスチャン夫妻であり，八重樫夫人と川守田夫人が尚綱同窓生である。

奥中山は樹木の広がる原野であり，耕地としては不適当なところだった。団長は「奥中山の地を乳と蜜の流れる郷にする」と語り，夫人はその傍らで支え続けた。

開拓者の住まいは掘っ建て小屋（柱を刺しただけ）でランプ生活，食料もままならず，栄養失調ぎりぎりの体力で開墾するのである。リウはこのような中で8人の子どもを育てながら，開拓者の母親たちを集めて食生活の知恵などを教えて励まし続けた。『奥中山教会40年史』にリウは，「開拓者の中から自分も含めて必死の思いで離農者，脱落者を出さないためにしたことです。若い時に尚綱の宣教師や，尚綱女学校でよい教師に恵まれ，与えられた知恵や知識が，今ここで開拓に入って役に立つように神さまが備えて下さったにちがいない。神さまのご計画にただ感謝です」と記している。彼女は尚綱女学校時代，1913年に洗礼を受けている。

開拓者の親たちは朝から晩まで働きづめで，子どもたちのことが気になりながらも，手が回らない状態だった。リウはこの姿に心を痛めて，日曜学校を始めた。葉の茂る栗の木の下で讃美歌の音が響き始めた。聖書のお話が語られ始めた。クリスマスには手製のパンを焼き，山苺のジャムを作って子どもたちにご馳走した。そして会堂が建てられ，礼拝が始まった。この小さな芽が成長し続けた。現在，奥中山には教会があり，礼拝には100名を越える参加者がある。

リウは「教会が近くて休むことなく礼拝に出席できることを感謝します。隣人の魂のために祈り，世界平和のために祈る毎日であるように祈り求めています。この世の生活と神に仕えることのどちらを第一にするかという問いかけに，立派に答えられる信仰生活に在るよう祈り続ける決心です」と祈り，神に従い隣人を愛することを願い続けた。

1992年4月，イエスの復活を記念するイースターの朝，八重樫リウは96年の生涯を閉じた。心から愛した奥中山で，心から愛した奥中山教会の人々に送られて，尚綱女学校時代に知った神のもとに召された。

今，奥中山は緑広がる酪農地帯となり，丘の上の教会から日曜日ごとに鐘が鳴りわたる美しいところである。この奥中山の歩みの中に，八重樫リウの働きがいかに大きいかを思う。

（『尚綱女学院100年史』629—631頁）

7 塩野和夫「アンタ、頑張ってや！」

10月も下旬になった夕暮れ時、柔道の練習を終え珍しく一人で帰路を急いでいた。美井元町から美井町を過ぎ、車の多い府道21号線に入ろうとする坂道に入った。そこで、前を歩いていた女性を追い越そうとした。彼女は、後ろから見てもずいぶん疲れているようだった。追い越そうとした瞬間に、なぜかその女性と目が合った。彼女は佐々木花子さんといい、同志社香里の広い校舎を一人で清掃していた方だった。

目が合うと、花子さんは「アンタ！」と声をかけて来られた。続いて、道の真ん中で話し出された。

花子さん アンタ、広い校舎を毎日一人で掃除して回るのはしんどいで。それに悪い生徒もおるしな。それでも、なんでしんどい仕事を続けているか、アンタ分かるか？

いきなり話しかけられて返答に口ごもる私に、その日花子さんは雄弁だった。

花子さん それはなあ、この学校からエライ人が出てきてほしいと思うからや。そやから、毎日頑張って掃除して回っているんや。

思いがけなかった言葉に、思わず心から花子さんに話しかけていた。

塩野和夫 おばちゃん、ありがとう。おばちゃんが掃除してくれている校舎で勉強できて、僕ら幸せや。

花子さん おおきに、そんなに言ってもらえたら、うれしいわ。

と答えた花子さんはその時、ハンドバックから聖書を取り出して言われた。

花子さん アンタ、これ貰ってくれへんか。

塩野和夫 ありがとう。でも僕も学校で聖書を勉強してるから、持ってる。おばちゃんの聖書、大事にしてや。

花子さん そうか。アンタ、頑張ってや！

それは、6年間同志社香里中学校・高等学校でお世話になった佐々木花子さんとのたった一度、5分間ほどの会話だった。しかし、あの時花子さんの真実に深く触れていた。それ以来、花子さんに清掃されている校舎が尊く思えた。

(塩野和夫『キリスト教教育と私 前篇』159-162頁)

8 深田雪子「母娘2代の寄宿舎生活」

「おお、櫻井さん！よく来ましたね」尚綱女学校時代を語る母の第1声は、いつもこの言葉から始まりました。1914年本科16回卒業の母（櫻井カヨリ）は、当時ブゼル先生のバイブルクラスの一員であった兄（弘）の勧めで、岩手県気仙郡住田町から入学、初めての仙台、人力車に乗って尚綱の扉をたたいた時、ブゼル先生が喜びをこめて迎えて下さった第1声だったとのこと。期待と不安でいっぱいだった母にとって、その声はゆるがない支えとなって、母は学校生活を始めました。校舎と寄宿舎が一緒の生活の中で、厳格さと温かさや情熱をもって導くブゼル先生の人格や、上級生・同級生の人柄にふれながら、今まで知らなかった世界に目を開かれたと話していました。日曜日、北一番丁教会（現ホサナ教会）の礼拝へ、ブゼル先生を先頭にして生徒は全員出席、学校でも寄宿舎でも礼拝をささげることが中心で、その中で知的学びと、人間的交流を通して母は畏敬すべき創造主、キリスト教の神の存在を受け入れることができたのです。学校生活は非常な喜びであったようです。夏休み帰省する船の中で、（母が）聖書の分冊を人々に配ったということを知りしときは、喜びは人を動かすことを知りました。

1950年、仙台空襲で焼失した寄宿舎再開の報せを聞いた父は、我が娘にも尚綱の教育をとの考えと勧めで、私は1955年、岩手県遠野から尚綱高校に入学しました。当時の寄宿舎は、1893年から校舎としても使用されたという男子宣教師館・木の花寮でした。宿生は岩手県や宮城県からの中学生・高校生・短大生、約20名が生活を共にしました。生活の中心は、教会・学校・寄宿舎での礼拝でした。私は新しい環境の中で人間関係を通して隣人の存在を考える機会を与えられ、高校2年の時キリスト教の神の存在を信じ洗礼を受けました。

（『尚綱女学院100年年史』358-359頁）

9 佐々木公明「尚綱に誇りをもって」

1892年バプテスト派の女性宣教師によって開始された小さな家塾「尚綱女学会」に源を持つ「尚綱学院」は、現在では幼稚園、中学校、高等学校、大学そして大学院を持つ男女共学の総合学院に発展してきました。創設時から一貫して「キリスト教精神に基づく教育」を教育理念として歩んで来ました。校名は中国古典「四書」の一つ「中庸」の1節「衣錦尚綱」から採られました。それは人間の「謙虚な振る舞い」に留まらず、積極的に「内面を磨く」ことを奨励しているのです。建学時から現在まで120年以上の間に、尚綱学院を巣立った卒業生は6万人以上に上っています。多くの卒業生が、地域社会で堅実な仕事をし、地域社会から高く評価されています。120年以上の長きに渡り、教育機関として発展し、地域社会から高い評価を得る人材を輩出してきたのは、尚綱学院がその建学の時点から大切に守ってきた精神、すなわち「建学の精神」に基づいた教育によって人材を育成してきたからです。尚綱学院の「建学の精神」は冒頭に述べたように、1892年に「建学した」宣教師たちの思いである、「キリスト教に基づく教育によって、他者への愛をもって社会の為に貢献する人間を育成すること」です。地域の人々と社会に貢献する卒業生を育てる基礎を築いた尚綱学院初

代校長のアニー・ブゼルは「学校の人気のあるなしは、その学校の在學生や教師方によるよりも、過半は学校を出た同窓生によるものであることを、皆さんは卒業証書と共に握って行って欲しいものです」と生徒達に熱く語りました。また「私たちは金持ちであろうと貧乏であろうと、高い地位にしようと思立たぬ片隅で静かに働いていようとどうという違いはありません。しかし、私たちが good である時に、世界は初めて私たちの存在によって良き所になるのです。金持ちや偉大な人物や学識の人になれる者はごくわずかでしょう。しかし私たちは誰でも良き人になることは出来ます」と生徒達を励まし続けたのです。

初代校長アニー・ブゼルが開設した聖書を勉強するバイブルクラスには当時の勉学意欲に燃えた2年生のグループが参加しました。彼らの多くがその後日本社会にとって重要な仕事をする事になるのですが、特にその中に日本の民主主義主唱のリーダーとなった吉野作造がいます。吉野は生涯を通し、弱者の救済、自由で公平な国を目指す社会正義のために働きましたが、その根底にはバイブルクラスで培ったキリスト教精神があったのです。吉野作造の精神的基盤を作ったのがまさに「尚綱」なのです。

尚綱学院の2代目校長のメリー・ジェッシーは第2次世界大戦によって、荒廃した人々の心を再生すべく奮闘しました。ジェッシーは「アメリカ人は根のついていない花をくれたので、キリスト教は枯れてしまいます。だからわたしたちはここで根を持ってきて、生徒の心に深く植えることで、使命を果たさなければならない」と、40年の働きの間、信仰に根づいた花を尚綱学院に咲かせようと努力したのです。

現在の尚綱学院はブゼル先生やジェッシー先生によって築かれた礎の上に、不変の建学の精神を継承して、最初は目立たないが、日に日にその真価を發揮する人材を世に送り出していますし、これからもその伝統を継承していきます。最後に尚綱学院の各学校が立地する素晴らしさを紹介します。名取ゆりが丘頂上付近の豊かな自然の中で、幼稚園園児は自由に遊び、花や虫を観察していますし、大学生は美しい緑のキャンパスで思考を深め、友人たちと様々な交流を楽しんでいます。一方、間もなく新しい校舎が完成する中学・高校は仙台市中心部に近く、それでいて広瀬川、青葉山を借景とし、美術館や博物館もある文教地区で最高の学びの環境にあります。

(『2015法人案内 学校法人尚綱学院』1頁)